

小笠原島紀事

卷之卅三

卅三

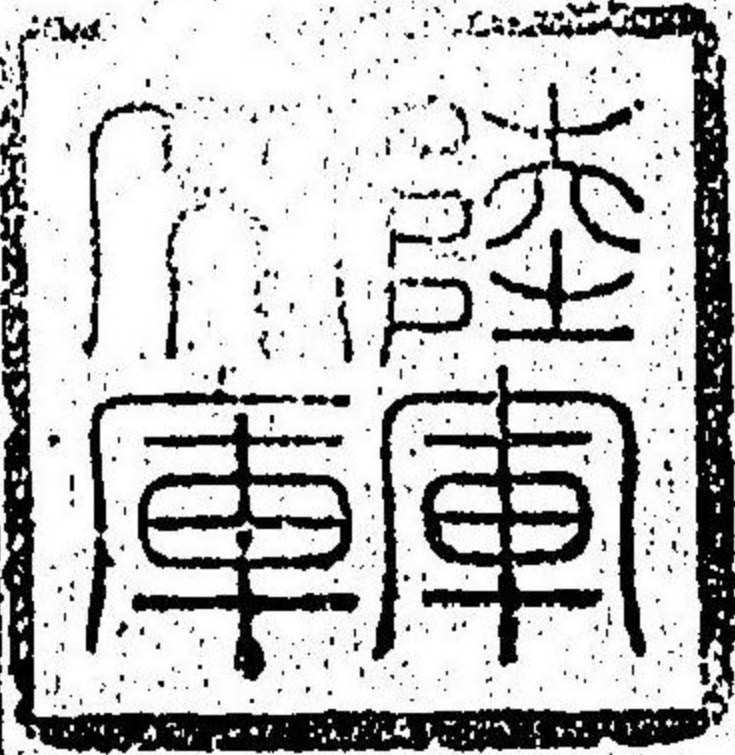
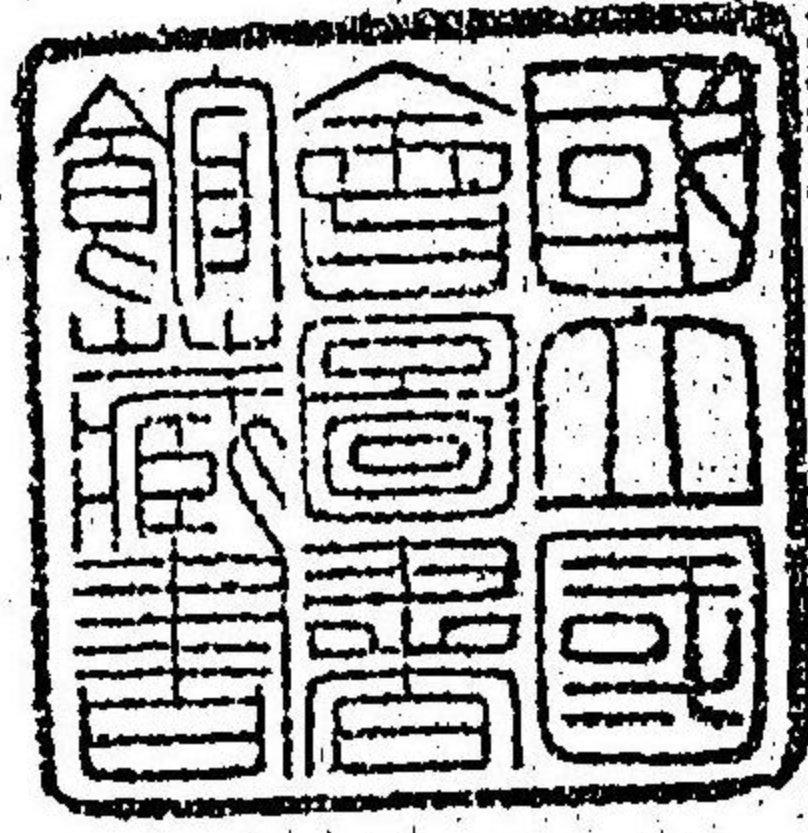
止

W243  
9

共 三 三 冊	一 號	一 四 七 番	九 門	普 利 漢
------------------	--------	------------------	--------	-------------

陸軍文庫  
和  
第一五五番  
共三三冊





W243  
9

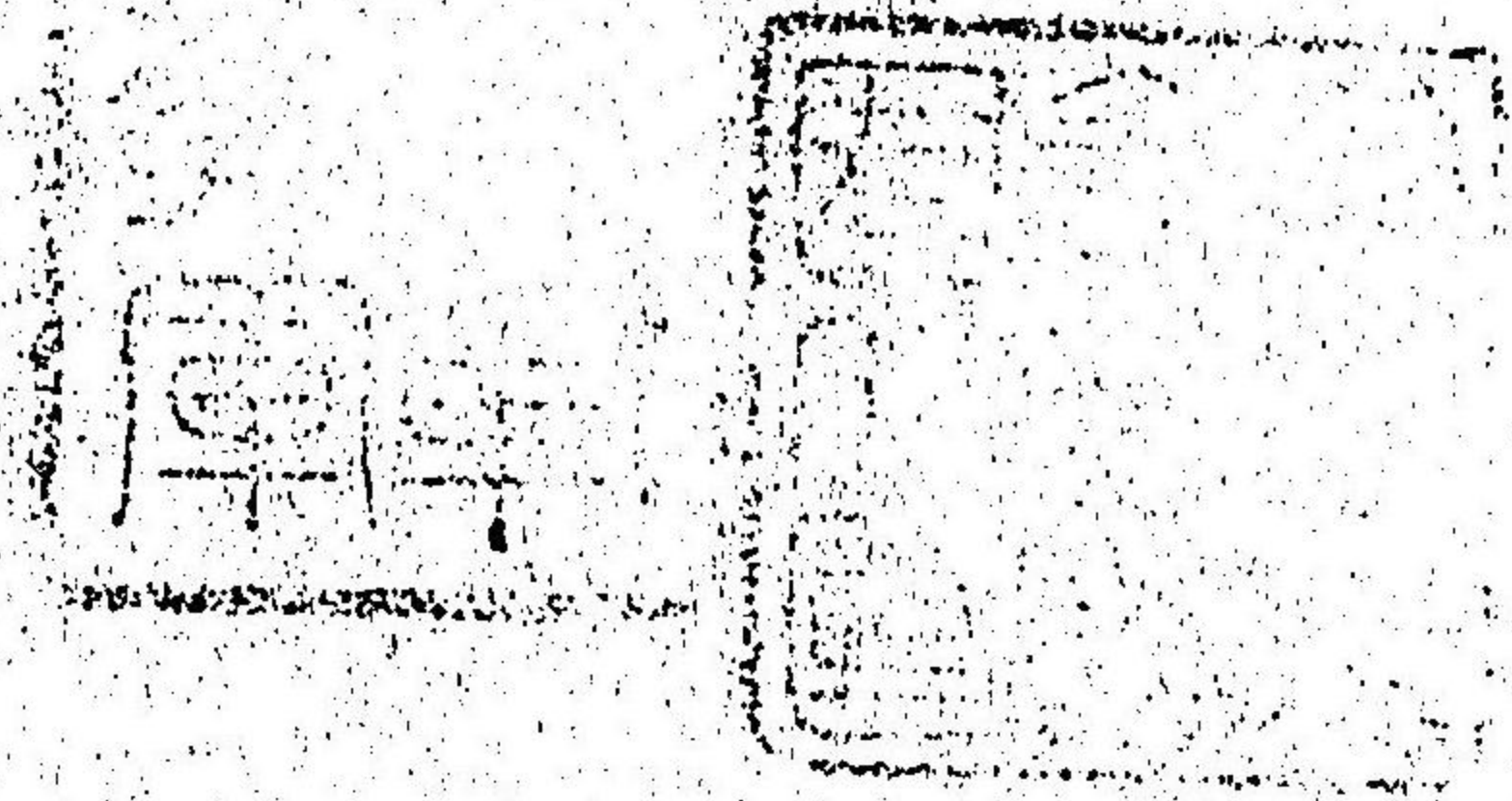
小笠原島紀事卷之三十一

目錄

○彼理日本紀行 無人島ノ部

51.8.24  
1080303





彼理日本紀行卷之十島無人部

瀬原壽人

内田又五郎

無人島ハ。日本海中ニ在テ。其地形殆々北南ニ向テ流れ。北緯二十六度三十分。二十七度四十五分の間ニ位シ。此島の中心を通する線ハ。東経百四十二度十五分ニ在リ。本島ハ一千八百二十七年。英国の加比丹<sup>ゴッ</sup>チエ<sup>ー</sup>氏。其測量家をして測らしめ。漫り其説を以て。正説とし。既ニ名義ある事を知らず。彼等々始めて。掘出せし如く唱へて。本島ニ名を命じ。其北ニ在る者を。バリス<sup>リ</sup>群島と称し。中央ニ在る三島の一を。バリス<sup>リ</sup>島。其二を。バリス<sup>リ</sup>ランド<sup>ド</sup>島。其三を。バリス<sup>リ</sup>ト<sup>ン</sup>と称し。又其南ニ在る者を。バリス<sup>リ</sup>島と称す。



此南の「バイレー」島ハ。鯨獵船の船頭コッファイン氏。一千八百二十三年始めて本島に到着して其地位を亞國に報告し其名を讀て「コッファイン」港と名付たり。然るに其後本島は何の名稱も無きけれハ。今予天文家の碩学。クラシス、バイン」氏の姓を取て「バイレー」港と名付しかり。又「ペール」島の大港ハ「加比丹」トイフ。既ニ名を命して「ロイド」港トイフ。本島ハ一千六百年間より普く世人の知るれず。一千八百二十七年に至り。加比丹「トイ」船頭「コッファイン」兩氏。偶島中ニ到着して。自ら始て檢出せし地也。諸紀ニ地名を命せしハ。實ニ面目を失ふに似たり。ケムハ此氏の説ニ違ハ前代。一千六百七十五年。日本人既ニ本島ある事を知り。之を名けて「グアタレ」トイフ。グアタレハ人ホ

き島の義あり。又同氏の説「概」ハ。一千六百七十五年日本船一隻大風の日ニ當リハ大島より纜を解き出帆せし風の為ニ流されて偶々大島より一島を發明せし此島ハ大島より東方ニ當リ日本里數にて三百里と隔つといへり。猶加比丹「トイ」船頭「コッファイン」等島中ニ上り見しニ更ニ人跡おけれ其氣候甚大溫和にして地質肥腴又清水を生し多く草木繁茂し殊ニ亜力樹亜力樹といふ樹を造る樹亜力樹といふ樹を造るあり。是を以て考れハ本と暖國ニ生する樹おれハ本島の地位日本より正東ニ當リて多く其南ニ當ると察せらる日本人ハ亦本島を無人の島嶼と見然れ共其海濱ハ海魚蟹類の多き事實ニ量るべからん。其大なるハ四七「ト」乃至六「ト」止の者ありといへり。彼理氏今「ナムフ



ル氏の書記するれと尤も挙る日本人の書記するれとを  
合せ見ると其土地形勢實は符節を合せたるや如し  
尤の抄譯は載る所の亞カ樹ハハハハ島は左リ

カカフプロロ名氏友訣州ハコクツウラニト、レハ抄説  
アロロといへる洋人の口交訣したる日本の三國通覽  
因説より。後書したる説の意あり  
本島の本名ハ。ヌカサ、ワラ、シマハ笠原島本名共。通例世人之  
を、モン、ニン、レハと稱す。漢名「ウジン」トシトハ共小人  
ホキ島の義不詳。今予地名を取て以て此書不載す。ヲカ  
ハ、ワラ、レハといふ名稱ハ本島ハ始めて渡來し。島中の  
因を作りし人の名より取る。即ち二百年前。南亞米利加  
の一部をカゲルラントといふ人檢出して。マガラニアと  
名けし同例あり。

無人島ハ伊豆國の南東海中。日本里數二百七十里に在  
リ。伊豆の下田より。ミヤケレハ島三宅より十三里。レハケ  
レハより「レンシ」島新まで七里。レンシより「コウラ」  
まで五里。「コウラ」より。ハ丈まで百八十里。其最南部は  
至れハ。二百里に及ぶといへり。

無人島と稱する群島ハ。北緯二十七度は在リ。島中の氣  
候甚く温和にして高山の際に。數十の溪谷を生じ。小流  
涇々として漲リ。自然に肥腴の地質不詳。是故に蚕豆。小  
麥。粟。其外諸種の穀類。甘蔗を虫じ。又ナンキンと稱する  
本。即ち巴豆樹。及び蠟を製する木を生す。漁獵極めて多  
く。以て産業と爲すべし  
島中ハ草木森々として繁茂すれ共。四足の獸類ハ甚く



少し。木は頗る巨大にして一人の手にて抱き得ざる者あり。又甚高さ支那の三十尋。即ち西洋の二百四十に  
一ト又至る者少からん。其水質堅牢にして美麗あり。此  
外にヨロ、ロフ、イン、ケ、リ、ラ、蓋し漢一名チヤマロポス、エキ  
セル、サ、と稱する高木。椰子。カレカバル。山樹支那にて  
ヨロアン、と唱ふる実を生ずる木。カナウラ。樹紫擅。ト  
トモ。漢名樟腦。ナツゾ、ヒケ、ス、ヲ、フ、マ、ウ、ン、テ、イ、ン、山  
中する管状の蕪花菓樹の象。地上に横をり生ずる。長春藤  
の葉に似る一種の葉ある高き木。肉苣蓉。桑樹等の類  
あり  
草類ハ。撒兒沙巴里兜刺。即ち山飯素。東桂。アサジラン、キ  
の蓋し漢と稱する。葉  
石辛

鳥類ハ。ハロキーツ。鳥の數種。鷓鴣。鷓鴣。白鷓。類似し多  
る一種の鳥にて。体格の長き海鳥居住す。此鳥類。皆家畜  
の如く徒手にて捕へ得へし  
本島に生ずる礦山物の主宰なる物ハ。明礬。綠礬。各色の  
石類。及び化石の種類あり。海中に鯨魚多し。又大なる蜃  
蚌。大貝及び世に海中の胆と稱するイレシの類あり。且  
海中より産する物品。極て多し。實に枚擧するに遑らば  
日本延實三年西洋紀元一千六百七十五年。長崎の住人。  
シマエ、サエ、モ、島屋左衛門。ヒノサエ、モ、未シマエ、タイ  
口、サエ、モ、島屋太即左衛門の三人。天文地理兩學に達し  
たる者不尠ハ。江戸小網町に住する船工棟梁。ハトベと  
いふ者。請引せられ。支那の精功なる船工を造り多し。



一大船を乗り船中の人負三十名にて。伊豆國下田に到り。本地の海軍局より路票<sup>ロウビョウ</sup>を得て四月五日。下田港を發し。八丈島に碇泊せり。支より又南東に向て奔り。八十箇の群島を檢出す是に於て本島の密國を穿し。加ふるに島中の氣候。位置及び産物を以てし今年六月二十日下田に碇着し。因説を上梓して。之を公行せり。右三人の上梓し多る因説よ。『このウラ』と。八丈の間に在る黒瀬河と稱する急流ある事を載せるに。實に怪むべし。此黒瀬河の幅ハ。二十ツツ即ち日本里數にて半里餘。其長さハ大約一百里東より西に向て峻急に流る。東より西に向て流るといへるハ。三國通覽を著し人の誤あり西より東に向て流る。此急潮。冬季春季より。夏季秋季に於て最も強し。シフ

江屋号の無人島に到るや。閏四月初旬にして。其碇るや。六月下旬に於て潮勢頗る緩あるを故に。此危き急流を知らざりし。身實に怪むべきの至りなり。無人諸島八十箇の内は。於て。其最も大なるハ。周囲十五里に於て。八丈島より廿し小なり。又之は次で大なるハ。其周囲十里あるを以て。大約天草島の大きなり。此二島の外は。八島あり。其周囲二里乃至六七里に及ぶ。此十島の平地ありて。人民居住すべく。又能く穀類を生ず。島内氣候煦温にして耕作に宜し。是故に他洲の人まで到り住すべし。島中諸所に。各種の貴き産物あり。右十島の外。叢雨たる七十箇の小島ハ。岩石嶮々として峙立し。一物も生じ難き地あり。



嘗て本島は罪人を送り。一地を開墾して耕作せしめし  
事あり罪人等群居して村落を爲し。帝國日本諸州は生  
ずる物品と。同様の物を産せし何人よても本島は一  
年の一度往來し得へけれは。交易忽ち盛なるに至り。其  
裨益ハ莫大あるべし此形勢を以て。餘ハ皆推知すべし  
日本安永年間即ち西洋一千七百七十一年より。一千七  
百八十年間。予官命を受けて。肥前國に赴き獨乙人。カ  
ンド、ブルレ、ヘー、ト氏と。相交りし時。同氏予は日本の南  
東に當り。二百里の海中に於て。著作家某氏「ウー、スト、エ  
トラン」トと稱する島嶼の事を唱へ國説を示せり「ウー  
スト」ハ荒蕪の義「エー、ラン」ハ島の義といへり今氏の  
説ハ本島未だ人民居住せざれ共。諸般の草木能く繁

生すれハ。將來人民を移し居住せしむべし。右の如く地  
質肥腴の島なれば。日本より遠路を厭て凡。植民せハ。必  
ず裨益あるべし。遂に渺茫として隔りたる。獨乙國より  
植民してハ。其利極めて少なるべしといへり

壽人拙するは此一節にて予といへるハ。三國通覽回  
説を著せし人自らいへるからん

今此註文の未だ無人島一件にて。予の獨乙人より聞き。  
肺肝を命すへき數十言を載せ以て後人は示すのみ  
右本條は述る所の大蟹といへるハ。ケン、ヘル、氏のいへる。  
大なる緑色の龜を。誤り認めて。大蟹といひしからん  
右の註文は述る如く。日本人一千六百七十五年に當て。本  
島を檢出すといひし。一説は尙ほ其以前。日本人本島に



渡来すともいへり英人の本島検出の事、於て更ニ興ふ  
る如し彼理氏ハ是より先一千六百六十二年四十噸の  
日本船其海濱より暴風の爲ニ流され偶々コイノ港ニ漂  
着して始めて本島を検出し本年久季ハ本港ニ在留して春  
暖を迎へ日本ニ飯りしと亞人ナウリ氏より聞り此時船  
中ニ些々の乾魚の外他物なきを以て島中の土人其野  
る所の食料を日本人ニ恵み興へしと云ふ其後八年を經  
て一千六百七十七年ニ當り佛蘭西船或る日無人島中の一  
島「スワフ」レトンを出帆せしニ遂ニ離れて海岸ニ爛々  
して火光を放ちたるを見出しけれハ小船を送り検査せ  
し其し日本船破却して船中の人皆大半溺死し僅ニ五  
人餘命を繋ぎ實ニ惘然の形勢ありけれハ佛船の將大ニ

哀愍の心を生じ彼五人を船中ニ乗せコイノ港ニ携へ行  
き遂ニ之を日本ニ送致すといへり此時我々「レユスコイ  
ハンナ」より出たる士官の一人也。偶々「スワフ」レトニ  
着して右の船の破却せし痕跡を見しといへり亦以て証  
とすへし。士官等島中の一小港ニ上陸し見しニ銅板銅釘  
おと尚ほ存在せり。此餘物及び其事跡を以て察するニ右  
の船ハ日本船なる事必せり。又器具など未ニ腐敗ニ至ら  
ず柱折りも至らされハ。久しく年月を經たる事ニ證とす  
るニ是れ已といへり

上ニ尋る鯨獵船の船頭「ゴフ」イン氏ハ其本國を載され  
ハ何れの國の人なる也。知るべからずと云。其姓字の連續  
を以て考ふるニ恐クハ亞國人なりん若し亞國人なる時



ハ。ナンチキトより出航して本島に到り、其一港に彼ら姓  
字を譲て、コッフィン港と名けしあるべし然るにビーチェ  
氏ハ、本島に到りたまはる。大小諒達して其名を命せす。バ  
イレ島といひしとそ。此バイレ島ハ、土人南島と称し  
無人島の一部と云。コイト港の南大約十二里洋の海中に  
在り。加比丹ビーチェ氏、英國の測量船、フロソト船を指揮  
して本島に到着し之を英國王の属地として、英國の名称  
を唱へし。久しハ、實は一千八百二十七年より然る小土人  
等英國の管下ある事を肯せり。英國の加比丹、ビーチェ氏  
ら命したる名稱を唱ふる者なし。之を譬ふるは、ビーチェ  
氏、北部群島中の二島を、ブクラン、ドスタッフレトンと名け  
し。土人等、此名稱を唱へず。コイト島、ホグ島と稱せし類

あり。英國人の無人島に未着して、其属地とせし年月ハ、銅  
板に彫刻し、釘にて樹幹に固定しありつれ共、久しうらす  
して消滅せり是故に英國より、無人島近海に航海せし者  
は余し島中に上陸し、近隣の岡上を登り、英國の国旗を翻  
し、以て英國の屬島たる事を表せしむ他人より之を見れ  
ハ、英船の未着せし事を報する者の如し。土人の島中の人  
民亦て、百事十分ふれハ、敢て他の管轄を受る事を要せり  
とて、政府を設る事を欲せり  
英國の加比丹ビーチェ氏、本島に到りし明年、魯國の海軍  
加比丹、トケト氏到着して英國の如く屬國とせし式礼  
を行ひ、又其私有とせせり  
右の如く諸説あれと本島を檢出せしハ、日本人多る事、實



「明けし。恐くハ日本人。其初殖民して直ち又返國せし  
あらん日本人在住の時。先ッ伊斯巴尼亞船葡萄牙船。獨乙  
船渡来して。無人島人と通親し其後五人。英人。魯人。未船せ  
し。なるへし。伊斯巴尼亞よりハ。教法の長官。未りし事と見  
し。本島を法語よて稱譽せし事あり。土人某氏へへるハ  
予始め本島に未着せし時ハ。一枚の板ありて。本島に渡来  
せしハ魯人を以て濫觴とすと書し者ありしと云へり。政  
洲よりハ。未た本島殖民する事を謀りたる者を問す

一千八百三十年に至り。五人歐洲人等。本國の男女教人を  
携て。ガンドウイ島より出航し無人島に渡来せり。此行の  
先登ハ五名にして。五人二名「サニール」サウリ「アルジン  
ビ」「チャピ」兩氏。英人一名。リナルド。ミルド「チャム」氏。丁株人

一名。キーンレス。ジョンリン氏。ゼン「エ」人一名。ガラチマ「ガラ」氏  
かり。彼理り本島に未着せし時。尚日殘留せしハ五人「ナサ  
ニール」サウリ氏のみ。「ミルド」チャム「フ」氏も尚ほ存命を乞と。  
「ラドロ」子「ミ」へる群島の一島。キユア「ヒ」に轉任すと云へ  
り。ゼン「エ」人「マ」ガラ氏ハ。既ニ物故しけれハ。ガウリ氏尚ほ  
壯年にして美人なる其寡婦を娶り。一子を産たり。ガウリ  
氏自ら些々の田圃を耕せし。頗る利ありと云ふ。又「ガウ」  
リ氏。自ら勤めて番者を作り。甘蔗を蒸餾して。糖水酒を製  
し本島に往來する。鯨漁船に繋ぎ。一時に数千の帛を貯蓄  
するに至れり其後三四年を経て。五人船一艘未着し。船中  
「ガウ」リ氏を親しき旧老友談論面諛の悪漢等を携へ來れ  
り。ガウ「リ」氏ハ。斯くとも知らず。彼の旧老友と相親み。貯へ



たる教子の帛を出し。老女と共之を地中に埋めたり。悪漢等此事を知りければ。教月の問語を卑し。身を謙り。益々サウラ氏に諂諛し。遂に其教子の帛を奪ひ。且婦人を掠奪。其家具の物品。及び旅記を盗みて。悉く之を賣却し本島を遁れ去たり。其後悪漢等ホノルルにて捕縛せらるれば。婦人身命を抛ち。一言を發し云へりけるハ。我再び無人島に飯るの面目なし。唯、帛を地中より掘り出せしや否。之を探索せんと欲するの事。

無人島の地形ハ頗る高く。岩石巍々として峙立し。噴火山たりし事察然たり。本島の水際ハ。珊瑚の小片散在し。水邊より漸く丘陵の斜地を登れば。一回飯線地方に生ずる青草滿地に叢生せり。山上及び諸所に散在する岩石ハ。前世

界の激動に由り。千形萬態を顯し。之を眺望すれば。城郭の如きあり。塔の如きあり。又巨大にして醜体ある猛獸に似たるもあり。島中岩石の間。孔の如く門の如き通路あり。其形恰も石工の鑿を以て穿ちたる小異ならず。蓋し此岩石ハ。其初未だ流動物たる時。偶々兩俟にて。其兩水山上より。急に海面に向て流れ平面を為して。溝渠を生じ噴火の竅は。由り。斯く異形を顯せし事分明あり。此岩石の異形かるハ。數百年の星霜を経て。兩水は洗濯せらるゝと。星依然として更に磨滅せし所なく。頭を回らし之を望むハ。某氏山上に登りくとして。新小石工に命じ。堅石を切り。石壇を設けし事と疑する。又コト山港内。南岡と唱ふる所小於て溶化石の中を貫通する奇異天然なる洞門ありて南岡



より北岡に達す。洞門の入口ハ其幅十五<sup>ロ</sup>ト其高さ三十<sup>ロ</sup>トトして屋根の如き可ハ其高さ急<sup>ニ</sup>四十<sup>ロ</sup>トトより五十<sup>ロ</sup>トトト小堂リ。建築家の穹隆形を作る者の如ク。且絶頂不要石ありて。恰も人造ノ勢髴たり且北洞門ノ海水流通して。小舟往来す<sup>レ</sup>。尚ほ許多の洞門あり。其一ハ長さ五十ヤルトトして。本港より高岡に通す<sup>レ</sup>。土人常ニ獨木舟にて往来せり。

本島の土質ハ礦物と各種の緑石とを混し。又円柱形の塔化石を含ま加之<sup>レ</sup>。ホルンフレシ<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>礦物白瑪瑙あり本島ハ往時噴火山たるハ證多し。往昔<sup>ニ</sup>ハ<sup>レ</sup>島に居住せし者の<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>ハ地震地たるの明證<sup>ニ</sup>ハ方今<sup>ニ</sup>至リ。毎年地上。雨三動する事ありと。

ロイド港ハ<sup>レ</sup>島の中央<sup>ニ</sup>して。其西部<sup>ニ</sup>在リ。本港ハ海中頗る深けれ共。船舶の出入<sup>ニ</sup>容易<sup>ニ</sup>して。碇泊する<sup>ニ</sup>風波を防ぎ。甚大安全の地かり碇を投す<sup>レ</sup>ハ。十八尋より。二十二尋<sup>ニ</sup>達す。本港ハ<sup>レ</sup>島の海<sup>ニ</sup>回<sup>ニ</sup>て。北緯二十七度五分と三十五秒。東經百四十二度十一分と三十秒<sup>ニ</sup>在リ。然れ共<sup>レ</sup>スコイハンナ<sup>レ</sup>船の船將の測りし所<sup>ニ</sup>てハ東經百四十二度十六分と。三十秒あるを以て。<sup>レ</sup>氏の<sup>レ</sup>誤<sup>ニ</sup>あり<sup>レ</sup>り測りしより五里東<sup>ニ</sup>在リ蓋し<sup>レ</sup>氏の<sup>レ</sup>誤<sup>ニ</sup>あり<sup>レ</sup>本島良港と稱するハ風ある時<sup>ニ</sup>當て。港内の船舶。自在<sup>ニ</sup>動搖し。風下<sup>ニ</sup>向ふ程の。深さと廣さとありて。入港<sup>ニ</sup>便<sup>ニ</sup>なるを以<sup>テ</sup>ハ<sup>レ</sup>氏<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>水港の方向<sup>ニ</sup>を定<sup>ニ</sup>りたる説<sup>ニ</sup>ハ。實<sup>ニ</sup>正説<sup>ニ</sup>なるを以<sup>テ</sup>ハ彼理<sup>ニ</sup>氏<sup>レ</sup>の説<sup>ニ</sup>と合せて。之を附録<sup>ニ</sup>載<sup>ニ</sup>す。樹



木ハ未着する船屢々切取り積み去るに至甚た多量か  
り。水も亦十分あり。流水を汲む。其性甚た良し。居宅を建る  
木材はハ多き所あり。若し多又敷渡来して。家屋を建築せ  
ハ。忽ち用ひ尽すべし。水島に生する樹木の類ハ。ヤマナ  
シ。野生桑の兩種とす。ヤマナシと稱する木ハ。アラシル。メキ  
シロのリット、ウーットの赤木の義の類にて能く永久に堪る  
木あり

コトド港及び其近海ハ。良種の魚類極多々多量あり。其  
珊瑚類も多し。海中に列を爲し大網を引く事あたえり。  
是故に釣或ハ小網を以て之捕る漁獵の良地ハ。海濱より  
珊瑚の列を爲したる地部に近接したる深き海中にて。テ  
ニハ。ソムホールの十尋の義と稱する所は在り。魚の種類ハ

甚た多し。嘗て「エスコイハン」船にて。大網を投せし  
僅に五種を得しのみ即ち鱸一種、鱈二種「カル」未詳一種尋常  
の鱈一種あり。沙魚甚た多し。其小なる者ハ珊瑚石の間小  
遊泳し。犬来りて之を捕へ。砂上は揚る事あり。

又本島の海中に緑色の亀多し。渡来の船舶多し。之を取て  
食料とす。又珊瑚多し。蟹類極めて多し。れども珍奇なる者  
あらば。ヤマナシガトと稱する具ハ。食料に供ふべし。然れ共  
硬くして消化し難し。其他に食ふべき具類を見ず。蟹の種  
類甚た多し。して数ふるに違あらず。就中陸蟹多し。其大小  
形状。色澤。各々同一ならず。其最も多きは世に海賊「ハイル」又省備  
と稱する者。此海賊ハ。其脊は或ハ白色。或ハ黒色。或ハ  
大或ハ小。或ハ丸く或ハ長く。大小形状。色沢。悉く相同し。



からに具設の捨れたるを見て之を奪ひ以て其住所とし。本来の住居不し。是故に海賊又宿借の名義あり。

海陸の鳥類甚た少く実には怪むべし陸上には住する鳥類僅

に四五種は過す。其最も大なるハ島鳩の兩種にして。其他

ハ皆小鳥なり又海中の鳥類ハ鷗と他の一兩種の海鳥の

み本島の近海に至れば頗る巨大にして。其翼は死沢ある

海鳥を見るに似たり。

四五獸ハ羊鹿豕山羊且猫。犬多し猫と犬とハ其初其主あ

り得れ共今ハ之を失ふに原野山林に住しければ。土人大

に賤んで野獸と称し。其飼ふ所の犬を使役し。以て之を捕

ふ。往時スリッパレット島及び自餘の島嶼に來往せし人民

山羊と豕とを植し。方今不至り。スリッパレット島の山羊其

常より多く播殖せり。彼理氏もペーリ島北部の海岸に牝牛

二頭。牡牛二頭を残し又北島に上海産の円尾半五頭と山

羊六頭を止む。是れ後日播殖せしめんを為さず。

無人島中にて。居人の多きはペーリ島に非ず。彼理氏の到

りし時は僅に三十人なり。就中亞國人種三四人。英

人三四人。葡萄牙人一人。其他ハサントウ井込人。及び本島に

て出産したる兜葦なり。土人各々一地を耕し蕃薯玉蜀黍。

瓜。葱。芥。及に諸種の菓実を植也。其最も多きは西瓜。

バナナス。詳鳳梨と以此地上の産物を豕。雞。鷗。杯と共は貯

へ置き入港したる鯨獵船に鬻ぐ物品とす。スコイハン

十船。本港に四五日碇泊せし間。於て亞國の鯨獵船二艘。

英國の鯨獵船一艘入港して小舟を浮へ土人の許に到り。



食料を求め出港せし者あり。土人焼酒製の飲料を好むを以て本ト船中ニ備へ来る焼酒を右の食料とを交易せり。土人筋骨を厭てされハ。尚ほ廣く耕し得へし。方今土人の耕作する地ハ。諸所ニ散在し。多クハ海濱の低くして。海水ニ接する所ニあり。又海岸の平地ニも在り。其低き所キ山上より新かる溪水流れ来りて。作物を培養せり。其開墾したる地面島中を総計して僅小百五十ヤクレニハ我ク志歩余ナリ。又過す。地質ハ甚だ肥腴ニして。本島と同緯度のガテイヤ。ガナリヤ。両島ハ異なる事ナシ。本島ハ葡萄を作ら小適地ニして。又小麦。煙草。甘蔗。及び自餘の草類を作る。小畑あり。土人既小其自用の甘蔗煙草を植る事実小多量ナリ。

パール島ニ居住する人民ハ。洪福ニして。不足あるハ。歐洲より来住せし者ハ。其座右ニ心思を慰め閑化を進むるの具を備へ以て其意ニ適す。居人其室内を数箇小分ち支那製の畳を敷き。其壁ニハ畫幅を掛け椅子一兩脚を并へ。食盤を出し又藍物ニ區分したる物品。及び各色の石版を備へ。以て自己の鬱悶を破るのみニ非ん。奢侈ニ屬する物も備へ。眼目を樂ましむるの一具とせり。本島ニ来住するガンドウキス人ハ。航海家。交易家の親しく目撃する如く。其本國ニ齊しく。棕櫚を集めて屋上を覆ひたるを以て。恰モガシンドウキス島の一村を携へ来る者ニ似たり。爰小居住する者ハ。氣候平穩にして。身体の健康を進め。且土地豊饒ナレハ。僅小筋骨を勞し飲食ニ乏さ支不き。



を以て皆依然として。故國の情を起す者なし。是故に吾國  
人。歐洲人哥カナカ婦人の眞実善良なる者を撰ひ。細君と  
し。居住せり

提督彼理氏。本島に碇泊する事暫時ありと云。務めてバ  
ル島内の事跡を密に探索せんと欲しければ一隊の人員  
を命じ。之を分て二列と爲し。其一列ハ士官バイヤルド  
イロル氏を以て長官とし。其一列ハ副外科医官ブリス氏  
を。長官とし。内地に入て探索せしむ

右両氏提督の命を奉じ。密に探索せんとする目的を以て忽  
ち旅装を整へ。六月十五日早朝船中を立出けり。タイロル  
氏の麾下に属する者を。同氏と共に八名と爲し。即ちバイヤ  
ルト、タイロル氏。エック長。ベー子氏。傳令官。ホードマ  
ン氏。等

械補官ラウレンス氏。官食官ハムプトン氏。海兵スリッ  
水手テンニス、テルリ氏。支那人擔夫一名あり。バル島ハ  
叢雨多る一小島にして其長さ僅に六里ある。タイロル  
アリス両氏に分れて。検査する事あり。一日にして忽ち  
調えんと思へり。本島の北部ハ直に港口に接す。アリス氏  
検査の持場と爲し其南部ハタイロル氏検査の持場と爲し即  
ち下は述べる所の如し

十五日朝日出。リスコイハンナ船を離れ小舟を浮へ港  
頭の汲水場を建し上陸して諸人の食料及び彈藥を分ち  
與ふ此時偶々土着のカナカ人來りし故嚮道たらん事を  
請ふれ其肯せに豆す。カナカ人の居所までハ小徑あり  
て一岡を越へ三里といへり是に於てカナカ人の教を



所は微し行ひし其路ハ滑道<sup>スリ</sup>にして峻急且四岐線中  
生ずる草類繁茂し加之棕桐多し其間ハ沙穀米樹も茂り  
又奇生木ありて樹枝より樹枝に渡り恰も網を張たる  
如し此時未だ早朝なれば密林叢樹の間より落る白露密  
雨の降るは異ならされば諸人皆其水皮層に徹したる本  
地の地質ハ「コ」ト澆及び自餘の地質と同質にして壇形  
の岩石の破裂せし者と草木の腐敗せし者と相混して生  
せしなるへし此壇形の岩石と云るハ丘陵の脆性<sup>脆性</sup>粗造の  
石大なる橙花の刺きあるもの如く破裂して周囲は黄色を  
帯ひ落か来る者があるへし又諸所は高さ三十「コ」ト及  
ぶ大樹あり白花爛熳として既ハ満開を過ぎ地上に落て  
白雨の残れるもの如き所あり。

山上に登る道路ハ丘背にして遂に山頂に達し其間草木  
叢生し又棕桐葉大今を聞くる如く大木相接し蔓草密網  
を張り不肖し日光之を為す遮られ白晝も尚ほ暗然とし  
て二三十「コ」トの外を洞視する事能はされハ道を誤り  
し事ハ少くす既ハ登りたれば丘背の側は數十の小流  
あり其辺りに到れば数千の陸蟹足音は驚き其穴より出  
て奔り去る者幾千萬といふ数を知らず  
山上の縦横は一里若くハ半里の平面にして波紋の如き  
凸凹を生じ又深き溝あり山脊の一面は深き凹路あり  
て甚だ峻急なり之を下るハ一樹より一樹に傳しらす  
れハ下り難し其幾くある峻山の間の凹路ハ諸所は禿  
岩あり其餘は悉く青草叢生し此間一條の河流を生じて



岩石の上を通し草葉を穿て丘陵の下に流る実は原野の  
好風景あり

ハイヤルド、タイロル氏の一行は、  
ある原野を過ぎ、之を越へて其後、  
嶮難として行へらざるを以て、  
河流を渡りたる所、  
一道あり、路傍、  
一名印度産、  
小驚くべし、  
水の棕櫚、  
ひ見しは、  
人を見ず、  
は驚くべし、  
水の棕櫚、  
ひ見しは、  
人を見ず、

付多れハ史を黙して一発せし忽ち大音を叫びて出て来  
る者あり之を見れば南海島住の人種にして其面は薄く  
藍黥し其身は粗製木綿の襦袢と袴衣とを着したり此一  
男子自ら以へるハ予ハ水ノマルコイザ島の内ニカワの  
産として貴き司法官ナリニ。フルコイサは、ハ高貴な  
位階に見へるなり被れ自ら一舎を構へ耕作す一地在  
設けて犬敷足取四足を飼ひ清梁の形勢あり予等亦丁寧  
を尽し且彼ら部下を命じて親切に百事を告しめ又自ら  
彼ら住む所の溪は山稜を回り海岸の西方に至り始めて開  
くといへり司法司溪流を指していへるハ此河小流の如  
しと雖其水量獨木舟を浮ぶるに足る我々今一舟を掉し  
緑亀を捕へ飯りし所なりと彼れ自ら一大亀を携へ来り



之を屠りて四尺の犬を呼ひたり其へけれハ犬欣然有る  
容貌にて忽ち喰ひ尽してけり

司法司又予ハ向て云へりけるハ我は能く諸君を本島  
南部の極所は案内せん然るは往來をへき道路なく大約  
其里程三四里もあるあらんと此時又司法官一漢を呼び  
寄たり其名をヲタヘーリニと呼ぶ其顔色銅色を有し僅  
に英語を辨すヲタヘーリニ自ら南部に至る道を知り又  
能く野能を獵すと云ふ然れ共司法官行きて給てされハ諸  
君と共に行く事を欲せすと答ふ司法官其初ハ後述して  
兼諾せさせしむ過刻捕へ来りし電肉を收め終りたらハ  
諸君と共に南部へ赴かんと同意しけるを以て予等も當  
然の事なりと申たり

司法官の住む所の谷ハ其長さ洋里にて一里其幅ハ最も  
廣き所にて一里を四分するの一とハ此谷兩三條に分る  
予等も既に通行したるハ其小なる者にて其大なるハ東  
に向ひ中央ハ小河あり此谷の南部ハ岩石累々として恰  
も大塚を築き多るる如くおれハ実ハ往來すへるなり司法  
法官の居宅ハ海濱より半里餘の所あり本地の土質ハ  
真土にて土人の耕作して得る所の富穰なるを以て察す  
れハ地味極めて肥腴あると見えたり。煙草ハ殊ニ地質不  
應して其高さ五ヒ一止む及ぶ者あり。溪水ハ甘味を帯て  
清潔且終年一時も絶る事なしと云ふ司法官其指子ヲ擽  
様を盛り居し故何所にて取りしやと尋しハ谷の北にて  
取ると答ふ



司法官漸く亀肉を収められたレハ「フタヘ」タレ氏ら郷道  
て凹路に流る、溪水は沼に東南東に向ひ立出ける。此  
水底ハ所謂燻石の碎片相累り溪邊ハ凹紋線中ニ生す  
る草木及び寄生木多ク茂生しけれハ樹林の稠密なる  
土質の粘滑する事よて実ハ脚步を進め難くて二人後れ  
し者あり之を待人として名不跨り居りしハ一突の砲声聞  
へし故何やらんと思ひしハ二人未りて一尺の野熊を見  
出し之を狙撃せしハ惜むし中らさずしと答ふ土人の  
飼ふ大の樹林に入り野獸を驅逐するの切なく唯々其主  
人の左右にのみ在るを以て山中は連れ行ても其用を為  
さざるあり

溪流を離れて凹路の南部に出けれハ其道峻急にして樹

根は攀ち或ハ大なる蔓莖を撰び之は傳ひ登りしハ樹  
陰深く且樹枝路上は横たり人跡なき地なれハ各人皆別  
路に別れける唯郷導の兩人のみ早く山頂に達して予等  
を待居たり暫時にして各人皆登り来り相見れハ其手は  
疵を受し者あり是路上は棕櫚多ク其間ハハルマラチナ  
未と唱ふる水ありて其幹ハ「ト」餘其葉頗廣く葉角は  
刺を生し之の爲は傷られしありハ「ニ」ニニニと稱する木  
あり此木直幹にして其下部より二三十の嫩芽を生して  
地中に入り其形金字塔に似たり其上部ハ円柱の如く長  
く延て上端は肯々たる葉を生し美葉なり  
同伴の内は於て後れし者ありし故山脊に止り待居たる  
は比隣の溪中にて大に吠る声頻に聞へけれハ直小







よ手を搦て急よ落さる様用心して下り漸く回路は達し  
たれと未だ海濱に流る、溪流亦く十口一止より五十口  
一止の断岸ありて之よ登り此難路を経されハ。海辺は下  
り得ざるを以て同行皆大よ歎嗟せ里夫より或ハ先たち  
或ハ後れて漸く小流の側よ下り其先つ下る者今尚ほ岩  
稜を傳ひ峻路を下り来るを見れハ我も既よ彼の難路を  
能くも無難よ下れりと思てれて実ハ身体戦慄を催した  
り  
カヲヘータン氏一江を指して以へるハ之を南東江と称  
す蘇獵船の屢よ来る所よしして其来りたるを證せんとして  
大斧を以て一樹を切り其断痕を平よし今尚ほ存在すと  
本地の河岸よ於て雜草と共よ薮藪の生せし者あり是れ

自然生じ非ず嘗て人手よて植し者あるへし諸諸氏難路  
よ悩み大よ疲労し且炎暑焼る如くかれ共皆一所よ會し  
火を焚て今朝捕へたる小熊の肝臓と脛臓を取出し又携  
へ行たる豚肉及び其他の食料を合せ煮て之を食ひ各  
臨時の盛饌かれハ貪りて満腹よ至り疲労を慰し休息し  
ぬれハ既よ二時よ至て飯路よ赴るんと此時カヲヘー  
タン前路を経て飯りんと云し故諸氏皆亦前路の艱難を  
想像し其危篤を恐怖して顔色悽然多り然るは他よ飯る  
へき路なければ止む事を得ず前路より飯りこれと疲労  
を累ねしのみよてカヲヘータン等兩氏は誘てれ司法官  
々居宅の山溪よ飯着しけり  
司法官の許よ飯りて時計を見れハ既よ六時あるを以て



同氏も宅よりハ実ニ暫時休息せしのみして立出けるニ  
同行の一人大ニ疲労して歩行し得ざるを以て「コト」  
タン氏は頼み獨木舟にて「コト」港の南端カナカ人の住  
所ニ送り其他ハ皆今朝来りたる陸路より返らんとして立出  
たてし道見へすして鬱林に入り又雜草多し加之路上  
小凸凹ありて途中より又同伴の一人大ニ疲れ歩行し難  
き故ニ山上の平地を撰び一人を添て残り置き「コト」  
港の南端カナカは遠し本港ニある岩上ニ坐し本船「コト」  
イハンバを見れば暗夜朦朧の中ニあり是は於て返着を  
表せんが爲ニ小銃を連発しぬれば本船より小舟を浮へ  
来りし故彼疲労の者を迎へ同伴悉く之は打棄り「コト」  
イハンバは小返りし時ハ既ニ十時あり衆皆實ニ疲労を極

めたり副外科医官「コト」氏も同時ニ返着したり今日同  
氏の経遇したる途中の事跡ハ左ニ述べる所の如し  
「コト」氏は等本島の地質を検査せしニ諸所ニ於て嘗て火  
脈の噴出したる痕跡あるハ其初噴火山たてし事疑ふハ  
「コト」氏所謂檀状の石類ハ鐘乳石と緑石と相混したる物  
にして本島の基礎より其丘陵に至るまで悉く此石類ニ  
り爲る本地の凹路より一の硫黄泉あり之を嗅ぎ其氣猛烈  
之を味ハハ硫酸瓦斯あり又諸所ニ硫鉄多し島中ニ生す  
る所の草水本島と同緯度の噴火地ニ至る種類を見れば「コト」  
イハン港ハ強き噴火山の噴口なるべし其火を噴出するニ  
當て方今の港口ハ周囲ニ丘陵を生し其側ニ深き溝渠を  
生ずるが如くして其坑中より熔解して流れ出る可の物



呂卷く溝渠より海中に落ち鎮火の後一湾を生じて海水  
と灰燼と残留し水尽し漸く枯渴して唯々珊瑚の残餘を  
止め港底に沈在せし者なり

本島の地形同一ならず平地の丘陵の下より海岸に達し  
其土質は黒色にして植物を培養すへき糞土と其深底の  
珊瑚にして表面に此糞土と具殼石類を混じり五フー止乃  
至六フー止散在せし者なり此平地甚く肥腴にして既  
開墾せし所は殆ど巨大なる番薯王蜀黍ヤムス<sup>共不詳</sup>口  
西瓜野菜類殊に頗る巨大にして良種の甘蔗を生ず嘗て  
アイリス<sup>名國</sup>の薯種を齎し来り之を植へて試みし其年  
月未だ久しならず此地質に應ずるや否やを知らず江  
口の平地の開墾せし所未だ甚く些少なり其他所の肥腴

あるを以て察せらるる江口も亦肥地にして之を用ひる多  
人数糊口をへき物品を生せざるの理不可なり

本島の丘陵の平地より漸次登る者あり又俄然として  
急に登る者あり其俄然として登る者ハ一の臺上と又一  
臺を重ねたる如し江頭は屹立して相對したる兩峯あり

之を<sup>ス</sup>頭山と稱す其一山ハ一千フー止其一山ハ一千  
百フー止と云ふ此兩峯遠く海上より港口に當て見へ恰  
も航海客の港口を示す如く本島の實に航海の要峯不  
リ<sup>フ</sup>アース<sup>ス</sup>氏の検査したる北部半島ハ湧水多し唯  
々二泉のみあり其清浄なる飲水常と絶る時なし此二泉  
の外溪中諸所ハ湧泉あり其塩氣を帯ひ且乾枯するを以  
て頼むべからず兩候ハ溪間の凹路に数條の小河を生



海中に落水其河底岩石を以て晴候に至れば僅かに水  
気あるのみあり

草木の種類ハ田畝線中ニ生ずる草木にして木島と同緯  
度の地位ニ生ずる者の如く青々として暢茂せる溪中及  
以海濱ニ一種の大木多し土人之をクリエメト唱ふ此木  
の幹ハ大にして短く灰色の皮あり其葉ハ密にして枝の  
周囲ニ叢生し其葉狀を楕圓にして緑色を帯ひ表面平  
滑あり其花ハ枝端ニ開きて白色あり

棕櫚ハ丘陵より左右の溪中ニ至るまで鬱々として繁茂  
しければ其水体を見定む難し程にて他樹之が爲に壓せ  
らるる成長し難き者あり島中ニ生ずる棕櫚六種あり就中  
ハンパルムと稱する棕櫚最も多し又木種の内ニ於て頗

る巨大なる山毛榉の一種あり又トクウー下の木類似  
しある一種の大木多し山上ニ見ゆ桑樹ハ殊に多し  
て其周囲十三トより十四ト下及上者少くは  
短小なる草木の類ハ桂樹杜松柘植蕨ハ十上橙鳳梨越橘  
トハカリテスモセス共ニ苔の義未詳及び寄生木の種類甚多し  
野草の種類極めて多し偶々多し生ずる者あれ共牧畜の  
食料ニ供へ難し又未だ開墾せざる地ニ生したる二種の  
野草あり此草漫り繁茂して他草を生せしめり  
島中ニ数種の獸類を放ち多れ共雜草の内ニ臥し大樹の  
間ニ往來せしを以て悉く野生の獸類ニ化し多し鳥類ハ  
鳩鴛鳥カンドバイフルス詳未任又亀大蜥蜴小蜥蜴多  
し是れ島中從來の者ありし



右に述べる如く、<sup>1</sup>ル島ハ既に兩氏に命じて検査せしめ  
たるを以て提督彼理氏又士官其氏を招き、<sup>2</sup>ルポレット  
島の地質地形及び其要件を検査せしむんとす、<sup>3</sup>ルポレ  
ト<sup>1</sup>島ハ亦其初噴火山として平地丘陵溪谷ありとも開  
鑿すべき地位ナキ、<sup>4</sup>ルポレット島ハ西部ハ一小江あり海  
水意孤子浅し其周囲ハ八十<sup>5</sup>トより一千五百<sup>6</sup>ト  
の高山岩石直立し以て本港の南東より来る大風を防ぐ  
屏障と爲る者の如し

本江ハ小岬と珊瑚石とよて其周囲を繞らし北部に據す  
る所の岩間より清涼なして美味なる一泉を生じ其水量  
一分時間ハ三<sup>7</sup>カルロ<sup>8</sup>ニ<sup>9</sup>カルロ<sup>10</sup>ハ<sup>11</sup>大<sup>12</sup>約<sup>13</sup>を出<sup>14</sup>れ<sup>15</sup>と<sup>16</sup>い<sup>17</sup>ふ  
<sup>18</sup>ルポレット島の産物も<sup>19</sup>ハ<sup>20</sup>諸島と異なる所あり唯

々山羊大ニ播殖して数十足に及ぶれども峻山を越へ  
絶壁を渡り共生路を穿み来るを以て性質悉く野獸に變  
じ多し彼理氏後未<sup>21</sup>亞<sup>22</sup>國<sup>23</sup>交<sup>24</sup>易<sup>25</sup>の爲<sup>26</sup>は自<sup>27</sup>か<sup>28</sup>ら<sup>29</sup>無<sup>30</sup>人<sup>31</sup>諸<sup>32</sup>島<sup>33</sup>の<sup>34</sup>地  
形<sup>35</sup>及<sup>36</sup>び<sup>37</sup>其<sup>38</sup>要<sup>39</sup>件<sup>40</sup>を<sup>41</sup>檢<sup>42</sup>査<sup>43</sup>せ<sup>44</sup>ん<sup>45</sup>と<sup>46</sup>す<sup>47</sup>る<sup>48</sup>の<sup>49</sup>企<sup>50</sup>望<sup>51</sup>あり<sup>52</sup>し<sup>53</sup>今<sup>54</sup>ハ  
ル島を撰んで後日カリホルニアと支那との間を往來す  
る蒸気船の碇泊所とせんとす是故に彼理氏地形を検査  
し港内を探索し又後日の食料と爲るべき爲<sup>55</sup>ハ<sup>56</sup>ル<sup>57</sup>ポ<sup>58</sup>レ<sup>59</sup>ッ<sup>60</sup>ト<sup>61</sup>  
ルトに二島を敷足の獸類を放ちたり彼理氏又土人ハ野  
菜穀類の種子を興へ且後日用ふべき農具及び獸類を放  
ちし所以をも土人は申聞せたり此外同氏政廳<sup>62</sup>準<sup>63</sup>頭<sup>64</sup>石<sup>65</sup>炭<sup>66</sup>  
庫<sup>67</sup>蒸<sup>68</sup>気<sup>69</sup>船<sup>70</sup>會<sup>71</sup>所<sup>72</sup>を<sup>73</sup>設<sup>74</sup>く<sup>75</sup>へ<sup>76</sup>き<sup>77</sup>地<sup>78</sup>所<sup>79</sup>を<sup>80</sup>撰<sup>81</sup>ひ<sup>82</sup>之<sup>83</sup>を<sup>84</sup>本<sup>85</sup>國<sup>86</sup>の<sup>87</sup>私<sup>88</sup>有<sup>89</sup>  
とす其地位ハ江頭の北部にして其長さ<sup>90</sup>ハ<sup>91</sup>チ<sup>92</sup>ヤ<sup>93</sup>ド<sup>94</sup>の<sup>95</sup>海<sup>96</sup>水



日面し就中五百ヤルドハ海濱に接して深目所を撰ひ海中五十ピードの所を避波を設け以て大船の碇泊するに備ふ

提督彼理氏右の如く検査せしを以て亞國蒸気船碇泊所ハハール島適應の地多らん事を一書に記し之を本國の海軍局に達す其文を曰く

拙者常々太平洋海中を往復する船舶の碇泊所と集會所とを檢出し定欠人と希望ハたし居候間此行の初より琉球港と無人島中の良港とを撰ひ碇泊所として恰も連環の相連り驛程の相続く可如く以て飛脚蒸気船往來する線路の林泊を備へ度候今太平洋海中亞國に屬する海港と支那の海港とは蒸気船の往來出來せハ此盛代の歴史に

も稱譽する所にて亞國は世界萬國交易の爲に至要至切の良港に可有之存候

合衆國の歐羅巴との飛脚船ハゴッパト紅海印度海を経て一月中二週毎二日敷を遣へす必ず香港に達し申候香港より上海まで五日の海路は有之候上海よりガリホルニゴッパト合衆國より船を出し候ハ上海より歐洲迄の海路ハ英國より船を造り必に出し可申候

蒸気船にて上海を出帆し無き島ガリホルニゴッパト諸島を経てガリホルニゴッパトに達するに薪氷等の爲碇泊するを三日を定む三十日にて未着可致候是故にガリホルニゴッパトよりガリホルニゴッパト島中ガリホルニゴッパトの里數大約二千九十三里ガリホルニゴッパト島まで三千三百。一里ハ



ル島より上海河口ヤンツトケンまで千零八十一里総計  
六千四百七十五里有之候一日は二百四十里程にして海  
上二十七日碇泊三日は定む又ヤンフランシスより三  
一エルクまで二十二日程ふルハ上海より三エルク迄  
総日数五十二日にして着し可申候

英國より經路チカケマルセルスを経り香港に到るハ其日  
数四十五日乃至四十八日ハ相成候此日数ハ香港碇泊二  
日上海碇泊五日を加へ候ハ五十二日より五十五日  
て上海に到着可致候

上海を英國蒸氣船の往來する極所と定む又亞國蒸氣船  
の往來する所と定む申候右故英國船の持取る書翰ハ之  
を西に送てリウエルホールに達し亞國船の持取る書翰ハ

之を東に送てカリホルニアに達し其日数大約同日子可  
有之候

右の船路を備へ定易の便利を得候ハ、貨物を得の利を  
論せ凡拙者世に生業ある兼畧せりと名譽を得候又既  
に數十年來支那人カリホルニアに渡來致し候者其船中  
薪水を除くの外自費にて諸品を備へ一人前五十弗宛に  
有之候

支那人ハ質朴にして能く使役し堪る性あるを以てカリ  
ホルニアにて農業に従事せし欠度候

上海ハ方今支那の大交易場と相成殊に合衆國と交易を  
司りし以來ハ開港以來も越申候候し同國の産物上茶絹絲  
其外高價ある奇物を蒸氣船に出し五週にてカリホルニア



アノ送り八週より二ユーロ送り俵速く致し候ても其利益ありや吾や先見致し難く候

亞國にて東海は交易を司かんと思ふ無人島は實小至要なる地とす其証は彼理氏返國に至ると尚且心中は止む此書は草稿を終りて後たの追記を編輯家と授け加入せしめしなり

無人島追記

予曾て以て南の無人島は太平洋中を往還する船舶の碇泊所は無二の適地なりと又以て南の太平洋中無人島近海は遠く鯨漁船の薪水及び食料を求むるの好地如之かりナルニ是より日本を経て支那へ航海する船舶の石炭を貯蔵するは無二の地位ありと

是故に予此行は於て無人島に到らざる事を得たりしなり

無人島は亞細亞海との間を於て鯨魚多く殊に日本近海は多し帝國日本は獨立の國にして他國と交通せざる國に於て其手は陥り或は強囚或は慘刺の所置を受人事を恐れ鯨漁船も敢て其海濱に近づく者なし然るは今日に至ると既に日本と條約を結び盟文あり又不幸にして日本海岸に漂着する亞船又猛風の爲に破損し其修復を加へて入港する亞船は親意を以て待過せんと以て保証を乞はる衆皆吏は恐怖する事あり箱館下田兩港も船舶修復費永給興の爲に既に開港あり



前條に示す如く、あるを以て亞國の鯨獵船後來ハ  
日本海殊ニ東海ニ於て何の障礙なく安全ニ其海濱  
ニ入港すべし然れ共我々鯨獵船を日本の港内ニ其  
國法の制禁なく又其國民の妨障なく安全自由ニ出  
入せしむ難き所あり是れ一の欠典とす既に條約書  
ニ日本ニ於て箱館港下田港琉球ニ於て那霸港を以  
くと至皆從來領國なるを以て土人外國人を見て或  
ハ惡み或ハ嫉むの汎習急ニ脱し難く又鯨獵船の水  
夫レ粗暴過激あるを故ニ實ニ急遽相親知して交通  
し難うるべし是れ予々無人島を以ての議論を主張  
する所以なり予々見を以て是れハ本島の何處の管  
轄ニ屬するやと論せしが示す如く無人島中の大

大島ニ於て植民するを良策と以予既に此紀行  
ニ於て詳ニ本島の事跡を述へ今又加ふるに人民を  
植へ家屋を建てる事を以て予若し予々此策を施さ  
後未其殖民全島ニ播種すべし若し予々策を決定す  
る時ハ先づ數名の工匠ニ相謀り又同社を結以貯金  
を設けべし島ニ植民すべしされと其入費も恐ら  
ハ多量ニハ至らざらん先づ三四百噸の船二艘を以  
り鯨獵の用意を爲し倉庫住舎を作らるべき木材を積  
み送り又雜貨舖海軍需用品其他鯨獵船商船ニ要用  
ある諸品を備ふるに欠くべからざる要員を送り此  
船ニ乗せ島ニ到着せし殖民と荷物とを揚げ日本海  
及び其近海まで鯨魚を獵し時々本島に到着し此



二艘にて得る所の鯨油既一船に積むべき量に満  
たらば一艘ハ其鯨油を本國に輸送し復紙に植民を  
載せ且島中にて切要なる物品を積み来り二艘にて  
新陳交代すべし右の如くせし植民も久しかりし  
て播種し且此事件は關係しある同社に裨益を得る  
に至らん此時に至らん亞南英國佛國の鯨船ハ一  
ル島に輻輳して未仕の商家にてハ船中必用の諸品  
を求め農家はてハ野菜を求め工匠の家にてハ修繕  
を頼まん若し其代料なき時ハ右の船中不貯ふる鯨  
油を取るべし

○其初本島に到りし植民新に別宅を構へて産業を  
營むに至るまでハ跡より到る者ハ新嫁の者にて先

居の者と同居すべし者の外ハ漫りに到る事を許さ  
ば斯く同居せしむる時ハ同教相親み洪福相共し  
て異論なく又故障なく我ら教法を傳ふる基本を起  
すべし是は於て傳教師を招き日本臺灣其他近隣未  
開の諸國に遺すべし○方今カンドウ井ス諸島より  
日本海にて鯨獵する船舶近隣に到るべし海港なき  
を以て止む事を得ず其漁獵する地より數千里を隔  
て或ハカンドウ井ス島に到り或ハ香港に到り其要  
品を求め又無益の金貨を失ふ金主ハ之を為す大に  
敬助し水夫ハ疾病を生し且放蕩懶惰に陥り頗る凡  
儀を破るに至る今カンドウ井ス島を開き碇泊所と爲さば  
鯨獵地所の中央を以て往來の雜費を省き且水

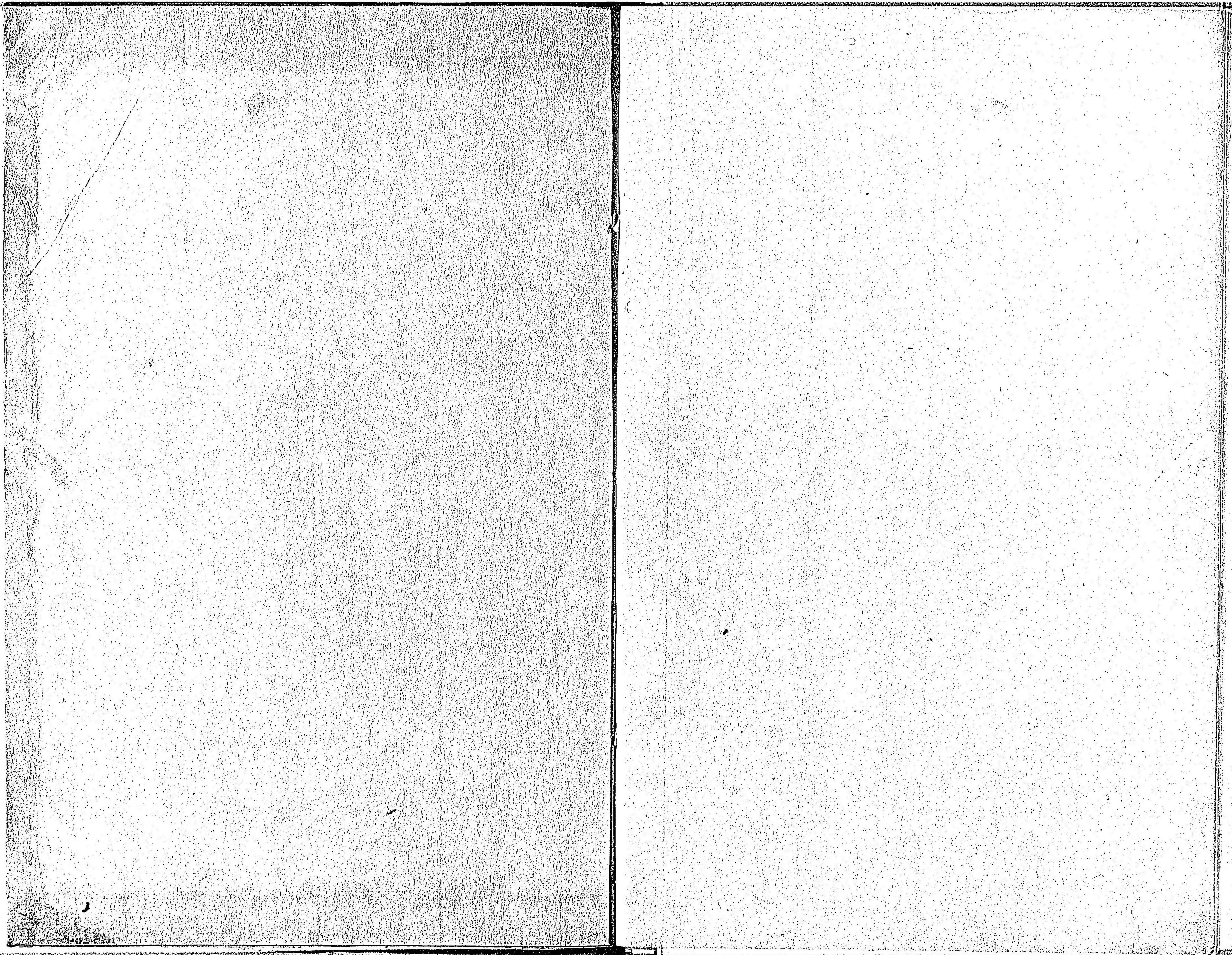


夫等も数年間の耽滞の地を遠く放蕩の術を失ふ  
へし〇無人島を具始て檢出せしハ日本人なるを以  
て之を管轄する權威ハ實ニ日本ニ屬す日本より希  
望するの外ハ本島を管轄するハ權威又ハ先づ殖民  
する者ニ在リ

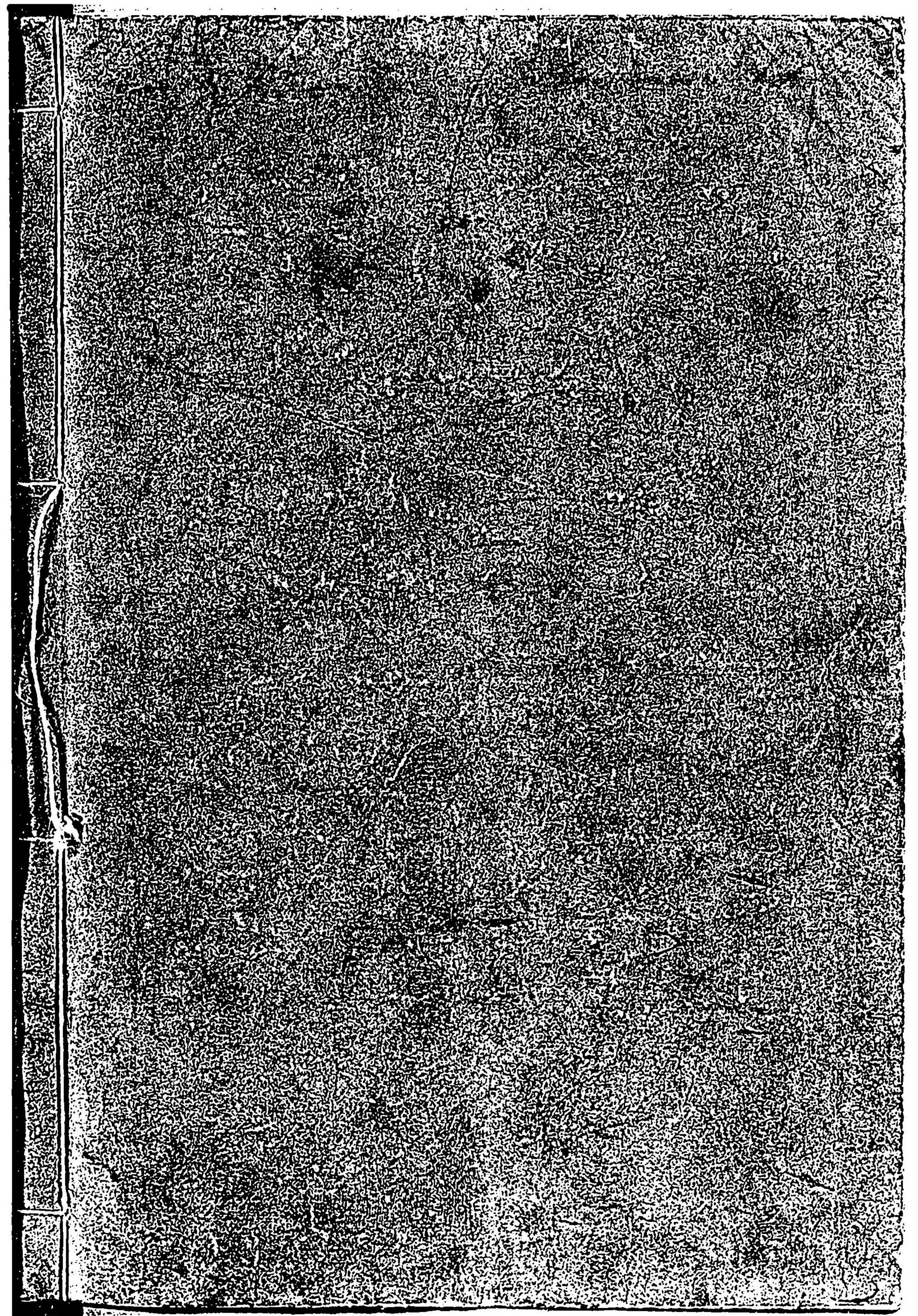
無人島は四日破泊してレコスコーインスピラトガの西  
船六月十八日早朝出帆して再び琉球ニ赴かんと其懸装  
をえ調へける

小笠原島紀事全部三十二卷稿成第一ノ卷頗ル教紙緘閉  
ニ不便ナラシム事ヲ恐レ割テ乾坤二卷トナシ且第十九ノ  
卷ヨリ全二十一ノ卷ニ至ルノ三卷ハ別真景圖ニレテ共  
ニ總計三十三卷ト為スナリ











此南の「バイレー」島ハ。鯨獵船の船頭「コッフィン」氏。一千八百二十三年始めて本島に到着して其地位を亞國に報告し。其名を讓て「コッフィン」港と名けたリ。然るに其後本島は何の名稱も無きけれハ。今予天文家の碩学「フランシス・バイ」氏の姓を取て「バイレー」港と名けしナリ。又「ペール」島の大港ハ「加比丹」氏。既ニ名を命して「コッフィン」港と名けし。本島ハ一千六百年間より普く世人の知る所ナリ。一千八百二十七年に至リ。加比丹「コッフィン」船頭「コッフィン」兩氏。偶島中ニ到着して。自ら始て檢出せし地也。諸君ニ地名を命せしハ。實ニ面目を失ふに似たり。ケムハ此氏の説ニ違フ前代。一千六百七十五年。日本人既ニ本島ある事を知リ。之ニ名けて「グランド」島といへり。グランド「グランド」人ホ

き島の義ナリ。又同氏の説ニ拠レハ。一千六百七十五年日本船一隻大風の日ニ當リハ大島より纒を解き出帆せし風ノ爲ニ流されて偶々大島の一島を發明せし此島ハ大島より東方ニ當リ日本里數にて三百里を隔つといへり。備加此丹「コッフィン」船頭「コッフィン」等島中ニ上リ見しニ更ニ人跡ナク水共氣候甚テ温和ニして地質肥腴又清水を生じ多ク草木繁茂し殊ニ亜力樹亜力樹樹樹ありし。多し是を以て考レハ本ニ暖國ニ生ずる樹ナレハ本島の地位日本より正東ニ當リて多ク其南ニ當ると察せらる日本人也亦本島を無人の島嶼と信然レ共其海濱ニ海魚蟹類の多き事實ニ量るへり。其大島ハ四七「コッフィン」乃至六「コッフィン」の者ありといへり。彼理氏今「ケム」